

ドナルド・キーン
徳岡孝夫訳

日本文學史

日本文学史 近代・現代篇三 © 1985 定価 2500 円

昭和 60 年 11 月 10 日印刷

昭和 60 年 11 月 20 日発行

著 者 ドナルド・キーン

訳 者 徳岡孝夫

発行者 嶋中鵬二

印 刷 三陽社

発行所 中央公論社

〒 104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替 東京 2-34

検印廃止

ISBN 4-12-001433-9

目次

一六 芥川龍之介

5

一七 永井荷風

64

一八 谷崎潤一郎

151

一九 モダニズムと外国の影響

253

(佐藤春夫 横光利一 伊藤整 堀辰雄)

日本文学史 近代・現代篇三

一六 芥川龍之介

大正時代の十五年間にもっともはなばなしい活躍をした文士は芥川龍之介（一八九二～一九二七年）であろう。芥川は若くしてあざやかな頭角をあらわし、やがて作品の文体や形式が大きく変ってからも多数の読者を惹きつけつづけた。彼の短編、とくに初期に属するそれは、今日では古典の中に数えられ、学校で読まれ、出版されてはいまなお版を重ねている。芥川はまた、広く海外で注目された近代日本最初の作家であり、主要作のほとんどは翻訳されている。そして日本国内においては、夏目漱石、森鷗外と並んで「現代の文学的教養の基礎を形づくっている」人（¹）と目されている。

芥川は、東京で牛乳工場を経営する新原敏三（^{にい はら としぞう}）を父として生まれた。そのころの父の顧客はほとんどが外国人であり、新原家が外人居留地だった京橋区入船町に住む三人の日本人の中に入っていたのも、商売が関係していたものと思われる。これまで何人かの研究者が、そのような幼年期の環境に、作家になってからの芥川の異国趣味を結びつけて説明したが、そうした説にはやや無

理が感じられる。幼い芥川は、生後まもなく親戚に預けられ、居留地を去っているからである。芥川が生まれてから約七ヵ月後に、彼の母は発狂した。そのまま回復せず、一九〇二年に死んだ。短かった芥川の生涯が末期に入ると、自伝的な作品の中にはしばしば母のことが出るようになる。なかでも『點鬼簿』のつぎの書き出しはよく知られている。

僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髪を櫛巻きにし、いつも芝の實家にたつた一人坐りながら、長煙管ですばすば煙草を吸つてゐる。顔も小さければ體も小さい。その又顔はどう云ふ譯か、少しも生氣のない灰色をしてゐる。……

かう云ふ僕は僕の母に全然面倒を見て貰つたことはない。何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行つたら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覚えてゐる。しかし大體僕の母は如何にももの靜かな狂人⁽²⁾だった。

母の発狂のため、芥川は母方の伯父と養子縁組みをして新原の家を出た。芥川という母方の姓も、こうした経緯に由来している。養母になった伯母と、もう一人の嫁か^いず後家の伯母で同居中だった女性が、彼に愛情を注いだ。養家の環境は文明的、藝術的で、実家とは大違いであったが、後年の芥川が作品の中で自己の過去に触れるとき必ずそこに言いようのない寂莫の情を湛えていることから、養子に出されたのをいかに鬱屈した感情で受けとめていたかが察せられる。加えて、

当時は、狂気は直接遺伝するものと考えられていたから、母の病氣のことは常に芥川の心の中に一つの危機として生きていた。小穴隆一宛ての遺書に「僕は養家に人となり、我儘らしい我儘を云つたことはなかつた。(と云ふよりも寧ろ云ひ得なかつたのである)」とあり、また「今になつて見ると、畢竟氣違ひの子だつたのであらう」とあることから、それがうかがわれる。

少年時代の芥川は学業成績優秀であるとともに濫読家であつた。最初は馬琴の『南總里見八犬傳』や馬琴の翻案による『水滸傳』等を読み、やがて尾崎紅葉、幸田露伴など明治中期の作家へ、さらにもっと近い鏡花、漱石、鷗外へと進んでいった。一方では、第一高等学校在学时らしい西欧文学への関心は、モーパッサン、アナトール・フランス、ストリンドベリーからドストエフスキーに及んだ。彼の小説の素材や語り口の多くが、その材源をこうした読書の中に得ている。

一九一三年(大正二年)に東大英文科に進むとまもなく、芥川は東大在學生を中心とする文藝誌『新思潮』の第三次同人となり、フランスの『バルタザアル』の英訳からの重訳を手始めに、作品を発表し始めた。自分では発表後「今更わが文のものにならざるにあきれたり」と書いたほど意に満たぬものだったが、はた目には当時の翻訳の中で一頭地を抜いた文章であつた。処女作とされる最初の創作『老年』(一九一四年)もやはり『新思潮』に載つたが、すでにして後年の主要作の特徴となつた的確で乾燥した文章の面白さが認められる。⁽³⁾

一九一四年(大正三年)から翌一五年にかけては失恋があつた。苦痛を忘れようとした芥川は学業を放擲し、それまでにも増して「雑駁を極めた」読書の中に入つていった。そしてその中から

二編の成功作が出たのだが、芥川自身は『あの頃の自分の事』（別稿）の中に以下のように回想している。

當時書いた小説は、「羅生門」と「鼻」との二つだった。自分は半年ばかり前から悪くこたはつた戀愛問題の影響で、獨りになると氣が沈んだから、その反對になる可く現狀と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短篇を書いた。書いたと云つても發表したのは「羅生門」だけで、「鼻」の方はまだ途中で止つたきり、暫くは片がつかなかつた。⁽⁴⁾

『羅生門』が「愉快な小説」であつたという告白は、当時の芥川の絶望の深さを思わせるのに十分であらう。

『羅生門』は、これも東大文科の機関雑誌であつた『帝國文學』に發表された。ところが、芥川の友人たちは口をそろえてこの作を酷評し、その一人に至つては手紙を書いて、小説などは早くやめるがいいと意見した。⁽⁵⁾意見に従つて芥川は雑誌発表の原稿に手を入れ、主として削訂によつて簡潔さを出そうとした。⁽⁶⁾しかし、芥川のもっとも有名な傑作とされるこの小説に、友人がそろつてこれほどの評を加えたのは異様とも言える現象であらう。

芥川の『羅生門』の典拠となつた『今昔物語』の説話は、僅々十数行の短いものである。芥川

は、それを他の資料から補足しながら小説にした。

所は京、朱雀大路の南端を扼する羅生門である。時は十二世紀、保元、平治の乱を経た都は荒廃に任せ、仏壇や仏具は打ち碎いて薪に売られ、洛中には盗人や殺人者が横行している。羅生門の下で雨がやむのを待っている一人の飢えた下人は「盗人になるより外に仕方がない」と半ば決心する。その夜のねぐらを求めて楼上に出た彼は、腐爛した死体のあいだをうごめいている老婆を見る。老婆は、死骸の首に手をかけると、長い髪を一本ずつ抜いていたが、刀を抜いて問いつめる下人の前に「鬢かづちにせうと思うたのぢや」と白状する。下人は冷然として、死者が生前に犯した悪事の物語を聞く。聞いているうちに、彼の心には一種の勇氣が生まれる。もはや一片の良心の咎めもなくなる。俺もまた悪人の一人になろう——下人は老婆の衣を剥ぎ取って、夜の底の中に姿を消す。梯子の降り口から、老婆は髪を逆さにしてその跡を凝視する。

物語は、芥川自身による生き生きとした時代的背景の描写、それに加えるに『今昔物語』から得たディテールによって、きわめて効果的に述べられている。人々の飢渴、悪疫の流行など、あさましい世のさまは『方丈記』からも得たのだろう。しかし、仔細に点検すると、そうした原典から得たものは意外に少なく、下人の心理と時代の雰囲気は芥川の外国文学の素養に負うところ大きいのがわかる。^(?)芥川は、のちに『澄江堂雜記』の中で、本質的には現代的であるこうした話の場をなぜ過去の日本に置いたかを、以下のように説明している。

今僕が或テーマを捉へてそれを小説に書くとする。さうしてそのテーマを藝術的に最も力強く表現する爲には、或異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起つた事としては書きこなし悪い、もし強て書けば、多くの場合不自然の感を讀者に起させて、その結果折角のテーマまでも犬死をさせる事になつてしまふ。……

しかしお伽噺と違つて小説は小説と云ふものの要約上、どうも「昔々」だけ書いてすましてゐると云ふ譯には行かない。そこで略時代の制限が出来て来る。従つてその時代の社會狀態と云ふやうなもの、自然の感じを満足させる程度に於て幾分とり入れられる事になつて来る。だから所謂歴史小説とはどんな意味に於ても「昔」の再現を目的にしてゐないと云ふ點で區別を立てる事が出来るかも知れない。……

序につけ加へて置くが、さう云ふ次第だから僕は昔の事を小説に書いても、その昔なるものに大して憧憬は持つてゐない。僕は平安朝に生れるよりも、江戸時代に生れるよりも、遙に今日のこの日本に生れた事を難有く思つてゐる。

芥川の子作——それもとくによく読まれた作品の中には場面を昔に設定したものが少なくないが、彼が好んだ時期は大別して三つに分れる。まず十二世紀、天変地異や戦乱に荒廢していた京都である。つぎにキリスト教が到来したころの長崎に取材した、いわゆる切支丹物。第三は明治

初期で、なかでも西洋文物が無批判に受容されていた開化の新首都・東京である。『今昔物語』をはじめとする文献から直接に情景を引用することによって、いずれの場合においても芥川は時代相のディテール、とくに悽愴苛烈な情を再現し、作品に迫真性を与えようと苦心している。ただ、ときには右に引いた芥川自身の言からもわかるように、「異常な事件」に執着するあまり、煽情的に偏る傾向がなきにしもあらずである。『羅生門』ほかの十数編は、そのような技巧が成功した場合であり、過去の影がヨーロッパ文学に通暁した芥川という現代人の心象を透過した結果、みごとな透かし彫りになって浮き上がっている。だが、ときには、その技巧が行き過ぎることもある。

たとえば芥川文学では長編に属する『偷盜』（一九一七年）は、時代を『羅生門』のころにとっているが、荒廃した都の景を叙する左のような記述が冒頭部分に出てくる。

日の光に照りつけられた大路には、あまりの暑さにめげたせゐか、人通りも今は一しきりとだえて、唯さつき通つた牛車ぎうしゃの轍が長々とうねつてゐるばかり、その車の輪にひかれた、小さな蛇なまじも、切れ口の肉を青ませながら、始めは尾をびくびくやつてゐたが、何時か脂ぎつた腹を上へ向けて、もう鱗一つ動かさないやうになつてしまつた。どこもかしこも、炎天の埃を浴びたこの町の辻で、僅に一滴の濕りしめを點じたものがあるとすれば、それはこの蛇の切れ口から出た、腥い腐れ水ばかりであらう。

車に轆かれて腐った切れ口を見せた蛇は、荒れ果てて見るすべもない京都の象徴なのだろうが、このあとも繰り返し登場する。それと並んで芥川が書いているのは崩れた小屋の中に半死半生で横臥し、野良犬に噛みつかれている疫病やみの女である。町の子供が三、四人、棒の先に蛇の死骸を引っかけてきて、その女の顔に放り投げる。「青く¹⁰脂の浮いた腹がべたり、女の頬に落ちて、それから、腐れ水にぬれた尾が、ずるずる頤の下へ垂れる」とまで書いてある。

このようなディテールが、もし点景されていたなら、それなりの効果もあっただろうが、あまりにも繰り返し繰り返し出てくるために、読者の神経はかえって麻痺してしまう。そして『偷盗』の残りの部分も、ずっとこの水準に止まっているのである。この作を書いてから間のない一九一七年（大正六年）三月の手紙の中で、芥川は自作をつぎのように評価している。

「偷盗」なんぞヒドイもんだよ 安い繪双紙みたいなもんだ 中に臨月の女に墮胎薬をのませようとする所なんぞある人は莫迦げてゐると云ふだらう その外いろんなトンマな嘘がある 性格なんぞ支離滅裂だ 熱のある時天井の木目が大理石のやうに見えたが今はやつぱり唯木目にしか見えない 「偷盗」を書く前と書いた後とではその位の差がある 僕の書いたもんぢや一番悪い¹¹よ……

これほどの告白をしなければならぬほどの長編しか書けなかったのは、明らかに作家としての芥川の限界を示すものであろう。それはまた、『羅生門』において成功したディテールの積み重ねだけによつては、大作の成りたいたいことをはつきりと示している。

初期の作品は、必ずしも荒涼無残なものばかりではない。芥川の最初の評判作になった『鼻』（一九一六年）などのように諧謔味の濃いものもある。

池の尾の禪智内供は、五六寸もある腸詰めのような鼻を顔の真ん中にぶらさげている。さまざまな療法を試みた果てに、ついに鼻を茹るることによつて短くするのに成功するが、それまでは同情してくれていた人々がかえつて彼の見栄を笑う。思わぬ成り行きに驚いた彼は、鼻の療治をしてくれた弟子の僧を含め周囲の人々に当り散らす。ところがある夜、鼻がむず痒くなつて、翌朝は元通りの長さになっている。もはやだれも嘲笑する者が無いのを悟つて、内供はかえつてはればれとしたものを感じる。

『鼻』もまた『今昔物語』に材源を求めたもので、同時にゴーゴリの『鼻』にも影響されている気配がある。だが一編は、全体としてみると、なによりも芥川自身のごく自然に荒唐無稽とユーモアを結びつける技術に負うところが大きいようである。『新思潮』にこの作品が出たとき、夏目漱石は筆をとつて、芥川宛ての手紙の中で「あなたのものは大變面白いと思ひます 落着があつて巫山戯てゐなくつて自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣があります 夫から材料が非常に新らしいのが眼につきます 文章が要領を得て能く整つてゐます 敬服しまし

た」とほめ、激励した。『鼻』はやがて当時の一流文藝誌『新小説』に転載され、芥川の名は広く知られるようになった。

そのころの漱石は文壇の中で屹立した存在であり、漱石山房には師を慕う弟子が集まり、その多くはのちに有名作家や評論家になった。中学時代から漱石を崇敬していた芥川は、一九一五年（大正四年）十二月初旬に至ってようやく勇気を振るい、親友の久米正雄（一八九一～一九五二年）と二人で、木曜日ごとに弟子が集う漱石山房を訪れた。以後の芥川は、比較的頻繁に漱石の書齋を訪れるようになったが「何だか夏目さんにヒプノタイズされさう」になり、すっかり固くなって、圧迫を受けるような感じを持った。⁽¹²⁾

一九一六年（大正五年）二月十九日に書かれた漱石の右の手紙は、『鼻』の材料の新しき、要領を得た文章、自然なおかしみをほめたものだが、たとえ『鼻』が大多数の読者に黙過されるようなことがあっても「そんなことに頓着しないでずんずん御進みなさい」と励ましている。さらに、同じような物を二、三十編も書けば「文壇に類のない作家になれます」と予言し、群衆を眼中に置くなとまで断言している。これほどの積極的な激励がいに芥川を励ましたか、想像されるのである。⁽¹³⁾

一九一六年（大正五年）十二月の漱石の死は、最初に漱石山房を訪れてからちょうど一年後の出来事で、芥川にとっては深刻な打撃であった。師の死後、彼は何度か、かつて師に面接したことのある夏目家の書齋に戻り、漱石の生前を偲んだ。⁽¹⁴⁾ 批評家の中には『羅生門』の中で芥川が人間